

# 七宝

## 七宝 古代～近代

七宝とは、一般的には、金属の表面にガラス質の釉薬をのせて焼きつけたもののことをいいます。その起源は古く世界最古の七宝は、ツタンカーメン王の黄金のマスクに代表される、紀元前十数世紀にまでさかのぼります。その後ヨーロッパ各地に分散し、日本には、5・7世紀頃に中国・朝鮮を経て伝わりました。しかしその制作技術は伝えられず、日本において七宝が盛んに作られるようになったのは17世紀になってからでした。

その頃の人物として、早田道仁があげられます。道仁を祖とする早田派は、代々徳川幕府のお抱え七宝師として、鏝や小道具など、刀剣装に腕を凝らしました。ただし、このときの七宝の主眼は「泥七宝」といって、釉薬に光沢のないものでした。

近代の七宝は、天保3(1832)年に越前府で七宝技術を獲得した風流の徳宗吉の登場により始まります。以降七宝は風流で盛んに制作され、幕末には風流の特産品として認識されるまでになります。愛知県には七宝町という地名が残されており、現在でも七宝制作の伝統が受け継がれています。その技法は愛知県内を中心に神奈川・東京・京都などへ伝えられ、大きく発展していきます。その背景には明治政府の殖産工業政策がありました。当時、日本の工芸品は海外で人気が高く、外貨獲得のための輸出品でもあったのです。

明治の七宝界で異名を馳せたのは、東京の清川惣助そして京都の並河崎之です。2人は「東京の清川、京都の並河」と称され、海外でも絶大な人気を得ました。

伝統的な有銀七宝を得意とした並河崎之に対して、清川惣助は無銀七宝を完成させました。細い金属線で作った輪郭の間に釉薬を詰め焼き付ける有銀七宝に対して、焼成の段階で金属線を取り除いてしまう無銀七宝は釉薬間の接切りがないため、輪郭に柔らかな感じが感じられて独特の趣があります。

近代には他にも、有銀七宝を基本として、様々な新しい技法が生み出されました。複雑に層目したものを、素地の素材に着目したものなど明治の末には現在行われている七宝の技法が全て出そろいます。

一方で、伝統的な有銀七宝の製作技術も一層精密化していき、職人にはより高度な技術と習熟が必要とされるようになります。七宝に関しては、明治末から大正初めに技術的な頂点を迎えたと言われており、現在では再現も難しいような、極端に繊細な文様、そして鮮やかな色彩の作品が生み出されたのです。



早田道仁 七宝 花文 磁器  
高松市立美術館蔵



早田道仁 七宝 花文 磁器  
高松市立美術館蔵



早田道仁 七宝 花文 磁器  
早稲田大学蔵



早田道仁 七宝 花文 磁器  
早稲田大学蔵



早田道仁 七宝 花文 磁器  
早稲田大学蔵



高松市立美術館蔵



高松市立美術館蔵



高松市立美術館蔵



高松市立美術館蔵



高松市立美術館蔵

近代(十九世紀～)  
近代風情(十八世紀)